

ニコラス・バアボンの貿易論について

相 見 志 郎

我々は最初に、ニコラス・バアボンの貿易論―自由貿易論の構造を明らかにし、ついで、バアボンを中心としての、アダム・スミス以前のいわゆる英國における自由貿易論のもつ性格にふれてゆきたいと思う。

そこで、このバアボンの貿易論の構造を論ずる場合、先づ彼が畫く全體としての經濟像の基調を明確にし、その經濟像の中における彼の貿易論の位置を指摘し、次いでそうした立場において把握せられた彼の貿易論―自由貿易論の性格を検討してゆくという順序による。

バアボンには多くの著書があるが、それらは殆ど全く時事問題に關するものである。そこで今直接に我々の問題にとつて考察の對象とされるものは、彼の唯一の體系的な論文である「交易論」A Discourse of Trade. 1690¹⁾と、彼の最後の著書で、ロックの貨幣論に對する反駁たる「新貨幣輕論」A Discourse Concerning the New Money lighter. 1696²⁾である。

- 1) Friedrich Raffel, Englische Freihändler vor Adam Smith, 1905, S. 33, 參照。
- 2) 以下 Barbon の A Discourse of Trade の引用は Hollander 版に依る。

一、バアボンの經濟像における貿易論の位置

一、トーマス・マンは、周知のように、國富の増大をバランス・オブ・トレード論—外國貿易論そのものを中心として論じている。¹⁾この點は、マンとは角度は少しく違つてゐるけれども、ルイス・ロバーツの貿易論においても同様である。²⁾これに反して、バアボンのそれは、バランス・オブ・トレード論—外國貿易論を中心として論じられてゐるものではない。

彼は「オランダ聯邦やヴェニス諸邦の強大と富裕とは、其のいづれの版圖に屬する土地も缺少なることに思ひを致せば、交易」Tradeが「一國民にもたらす地歩と利益が甚大なることを十分に證明するものである」として、「交易は今や、國家を富ましめるに役立つと同じ程度に、國家を維持するに必要となつてくる」と云つてゐるが、この場合、バアボンにあつては、この交易とは、實に生産と流通とを含めた意味において使用せられてゐる。即ち「交易とは、財を造ること、及び一種の財を他種の財に對して賣ることを云う。財をつくることは手工業Handy-Craft Tradeと呼ばれ、そして、これが製造者は工人Artificerと呼ばれる。財を賣ることは商業Merchandizingと呼ばれ、これが販賣者は商人Merchantと呼ばれる」と。

バアボンは、この交易という概念を中心として、この立場より彼の全經濟像を構成してゐるように思われる。そして、このような交易觀に立つてくると、その議論の中心面が、ある程度國內市場という立場へと移動してゐることを示すものである。そこで、彼の立論にあつては、國內市場に固有な、その價值—價格論が大きな比重を占めることとなり、³⁾このことと關聯して、後に論ずるような、富觀、貨幣觀を執るに至り、そして、そこから、一國の繁榮の徴しをバランス・オブ・トレードによる地金の流入に求めずに、「如何なる場合に交易國民が、繁榮し、富裕になつてゐるかを知りうるただ一つの誤りなき徴しがある。即ち、それは、人口がより稠密となり、

住民がその都市を擴大し、新設し、そして、商船及び海洋勢力が増大する場合である」と考え、更に富裕に至る道も「國家は、勤勉、技術、貿易によつてのみ、富裕となる」と論ずるに至つたものと思われる。⁹⁾更に、バアボンが以上のような交易觀に立ち得たが故に、彼の志すところは、ノオスのそれとは違つて、實際その間に大きな差異が存在したけれども、しかもなお、次のように確言することが出来たのである。「多くの人々が何故に交易について眞の觀念をいだかないのかといへば、それは彼等が主として關心をもつてゐる特殊な交易部分にのみ彼等の考察を傾注するからである。而して、その特殊部分を形成する最善の規範及び法則を發見すると、交易という大きな全體を形成する場合にも、彼等は右と同じ觀念をもつて彼等の考えを律し、全體と部分との間の種々の比例の法則を反省しないから、一つの極めて不愉快な概念をもつのである。それは恰も、目や耳や手やまた身體の他の部分を上手に描くことを習ひえた人たちが（均整の法則に通じていないので）これらを結合した場合には、極めて不恰好な身體をこしらへあげるのと似てゐる」として、從來の交易論の偏向を指摘し、自ら積極的に「それ故に、交易を眞に描き出さうと思ふものは、何人といへども、全體と部分とを合した粗描をつくらねばならない。もちろん、この粗描は十分に完成された一幅の繪ほどのよろこびを與えないとしても、しかも部分の快感は同様に認められる。そしてこれによつて、全體の形に最もよく適合するような手段がとられるであらう」と。¹⁰⁾

さて、バアボンの交易論が生産と流通との統合、さらに、その流通面もその主張する内容から見ると、國內市場に大きな比重のかけられてゐる事に關しては、彼が、交易を促進する主要な諸原因を論ずる、その内容によつて、明示せられてゐるように思われる。そこにおいて彼は次のように云つてゐる。「交易を促進する主要な諸原因は（よき政府、平和、國の位置、並にその他の便益をしばらくおけば）貧民の勤勉 Industry in the Poor と富

者の裕達 *Liberality in the Rich* とである。裕達とは貧者の勤勉によつてつくられたるすべてのものを、心身の用のために自由に使用することを謂う¹¹⁾。そして、浪費 *Prodigality* を交易を促進するという意味においては是認し、貪慾 *Covetousness* を批難するわけである。そこで彼は「交易を促進するにあづかつて最も力ある出費は衣及び住におけるものである¹²⁾」とし、「交易という大きな全體をたえず運動せしめる¹³⁾」ものとして流行を賞讃することに¹⁴⁾なる。次いで「食、衣よりも遙かに多數の職業と人々とを雇傭する¹⁴⁾」というので、交易を促進するものとして建築 *Building* をあげる。更に、共同生活がかかる衣、住という交易にとつて有利な出費を増大せしめるという意味において、都市の擴大にも言及しているわけである。¹⁵⁾

ところで、以上のように、交易論も、國內市場にその中心を移動せしめてくると、既述のように、そこでは價值、價格論が、大きな比重を占めるに至つてくる。バアボンの價值、價格論が如何なる内容のものであるかはさておいて、彼が一應その價值—價格論を詳細に展開せざるを得なかつた理由であらう。¹⁶⁾

それと同時に、かかる立場は、そのまま貨幣をもつて富であるということとは出来なかつた。彼は富について次のように云つてゐる。「各巨國の特産品 *Staple Commodity* はその國の富であり、永久的であつて、決して消盡されることはな¹⁸⁾う」と。又別の個所で、ロックの、銀は内在價值を有し、このために、一切のものの價值の尺度となるという見解に反對して、彼自身の貨幣論を展開するために富を論じ次のようにも云つてゐる。「富 *Riches* とは大きな價值 *Value* を有するようなすべてのものを云う。價值とは物の價格 *Price* の意である。」¹⁹⁾として「一切の事物の價值はその有用性 *Use* から生ずる、有用性を有せざるものは價值を有しない²⁰⁾」と。しかも、この有用性とは、肉體上の欲望 *the Wants of the Body* と精神上の欲望 *the Wants of the Mind* とを充足するが故に有

用であるとする。²¹⁾なお後の彼の貿易論のために一言すれば、この場合肉體的欲望の充足としての有用性によるよりも、精神的欲望充足のための有用性によつて多くのものが價值を有するものとされている。²²⁾

このようにして、金銀には眞實の内在的價值があつて、そのみが眞實の富であるという説が否定されて、金銀は單なる商品にすぎないものとせられ、²⁴⁾價值等しいものは、それが金、銀であれ、他の商品であれ等しいものであると論じられている。²⁵⁾

かくして、貨幣と金、銀とは分離されて、貨幣は單なる流通用具に局限せられることになる。²⁶⁾「貨幣とは法律によつて作られた價值を謂う。而して其の價值の差異は刻印と錢貨の大さによつて知られる。貨幣の有用性の一つは、これによつて他のすべての事物の價值が計算されるところの、價值の尺度たる點にある。」²⁷⁾そして「貨幣が金又は銀でもつて造られなければならないことは絶對的に必要である譯ではない。けだし、貨幣の價值はひとり法律より生ずるのであるから、刻印が捺される金屬の何たるかは、重要でないからである。」²⁸⁾「貨幣は通常ある金屬からつくられるが、しかもそれは、絶對に必要であるというよりも便宜のためである。」²⁹⁾或は「貨幣は交換の便宜のために、法律によつてつくられた想像的な價值にすぎない」³⁰⁾と主張せられている。

1) Thomas Mun, *England's Treasure by Foreign Trade*, 1664.

2) Lewis Roberts, *The Treasure of Traffic, or a Discourse of Foreign Trade*, 1641.

3) Nicholas Barbon, *A Discourse of Trade*, p. 5. 以下 Trade と略稱す。久保芳和譯「交易論」五頁。

4) Barbon, *Trade*, p. 9. 久保譯「一頁。なおこの商人とは主として外國貿易商人が論じられていたとも云える。と云うのは、バアボンはそれに續けて、「また商人は彼が取引する國の名によつて區別せられ、オランダ商人、フランス商人、スペイン商人、トルコ商人と呼ばれる」と云つてゐるからである。

ニコラス・バアボンの貿易論について

(三四八) 四四

- 5) バアボンの交易論の中心テーマは次の言葉で表現されている。「交易の主たる目的又は業務は収益のあがる取引をなすにある。取引をなすに當つては次のことが考慮されねばならない。賣らるべき商品、これら商品の量と質、商品の價值又は價格、それによつて商品が購われるところの貨幣又は信用、取引を行う時に關係する利子。」Barbon, Trade, p. 9. 久保譯一三—一三頁。

- 6) Nicholas Barbon, A Discourse concerning Coining the New Money lighter. 1696, pp. 51—52. 以下 Coining と略稱す。
Barbon, Coining, p. 48.

- 8) 更に Barbon は、たとえバランズ・オブ・トレードが順であつても、そして地金が流入しても、一國は貧乏になり、破滅するよりもありうると云つてゐる。Barbon, Coining, p. 50. 參照。

Barbon, Trade, p. 7. 久保譯八頁。

Barbon, Trade, p. 7. 久保譯七—八頁。

Barbon, Trade, pp. 31—32. 久保譯五一頁。

Barbon, Trade, p. 32. 久保譯五三頁。

Barbon, Trade, p. 33. 久保譯五三頁。

Barbon, Trade, p. 34. 久保譯五五頁。

Barbon, Trade, p. 34. 久保譯五六頁。

この點に關して久保芳和氏の詳細な論文がある。經濟學雜誌二三卷一號。

價值—價格論に關する Barbon 自身の結論を示すと次のようである。

「(1) 何ものもそれ自體に價格 Price 或は價值 value をもつものはない。

(2) 一切のものの價格或は價值はそのものに對する必要 occasion と有用性 use から生ずる。

(3) その必要に比しての豊富と稀少とが事物により大なる、或はより小なる價值を與える。

(4) 一貨物の豊富、稀少は同じ目的に使用されることのない他の貨物の價格を變更せしめない。

(5) 交易や商業においては、その價值の等しい場合、貨物には差異がない。」Barbon, Coining, pp. 10—11.

Barbon, Trade, p. 10. 久保譯一三頁。

18)

- Barbon, Coining, p. 2.
 21) 20) 19) Barbon, Coining, p. 2.
 Barbon, Coining, p. 2. 尙 Barbon は、肉體上の欲望をみたすものは、real and natural value をもち、それは、あらゆる時、あらゆる場所において價值をもつとし、精神的欲望をみたすものは、Imaginary or Artificial value をもち、それは人々の意見 opinion によつてその價值が變更すると論ず。Barbon, Coining, pp. 3—4.
 22) Barbon, Coining, p. 3.
 23) Barbon, Coining, p. 4.
 24) 25) 26) この點に關し Barbon に全く重商主義的貨幣觀が残存してゐないと言ふのではない。Barbon, Trade, p. 17. 參照。
 Barbon, Coining, p. 7.
 勿論流通面における、この流通用具としての貨幣の重要性に關して Barbon はその Coining に於いて、Of Raising the Value of Money, with the cause of it, and the effects と云ふ項目の下に、六一—九六頁にわたつて詳しく論じてゐる。
 27) Barbon, Trade, p. 16. 久保譯二四頁。尙 Coining, p. 13. 參照。
 28) Barbon, Coining, p. 13. 勿論この點において、Barbon は全く金屬の價值を無視することは出来なかつた。それは彼が Locke との對比に於いて次のように云つてゐることから知られる。Locke は貨幣價值=銀價、Barbon は「貨幣價值=銀價+權威」としてゐる。Barbon, Coining, p. 12.
 29) 30) Barbon, Trade, p. 22. 久保譯三五頁。

二、バァボンは以上のように、生産と流通とを含めた意味において、國內市場における交易論を中心として、その全經濟像を畫いてゐるように思われるのであるが、この場合、それでは、彼の外國貿易論は其中で如何なる位置を占めてゐるのであるうか。

バァボンが擧げてゐるところの、交易の對象となる物品の分析から、この點を究明してゆこう。彼は「すべて

交易の對象となる貯財及び商品は、海陸に産するあらゆるものであつて、全宇宙の動物、植物、礦物である。これらの商品は自然的 Natural 商品と人工的 Artificial 商品とに分ち¹⁾ゐる」として、自然的商品と人工的商品とに區別する。ところで「これらの兩種の商品は、それらが主として存在し、又は造られる國々の特産品 Sample Commodity と呼ばれる²⁾」として、夫々各國の氣候、風土の差異により、各國の特産品となることを指摘する。

そして、更にこの特産品は、自國の特産品（各國が自然的に且つ最もよく生産するもの）と外國の特産品（外國の一地への獨占貿易によつて、又は特殊な技術の獨占によつて、一國が獲得するところの或る外國品）とに區分する。そしてこの場合、先述せるように、各自國の特産品はその國の富であり、永久的であつて、決して消盡されることはないとの主張において、個人と國家とを同視するマンのバランス・オブ・トレード論に反對し、³⁾「各自國の特産品は、その國の外國貿易の基礎である⁴⁾」と論ずるのである。何故なら、この自國の特産品あるが故に、外國の特産品とこれを交換し、以つて國民の生活を豊富にしうるからである。⁵⁾ここにバアボンの貿易論が、貿易の相互扶助的性格を一つの支柱として、ことが確認せられる。しかし、バアボンは、このように貿易のもつ相互扶助的性格を論じているといつても、それは純然たる國際分業論的立場に立つてゐるとは云えない。バアボンには一國一般を中心とした經濟の自律的な觀念——自然的觀念が横たわつてゐる。彼は「交易の有用性は、必要品、即ち生活の維持、防衛、安易、快樂及び榮華のために役立つものを造り且つ調えるにある⁶⁾」として、一國內での交易分野を先づ畫き、次いで外國貿易に及ぶのである。「かくて職のある人は仕事に忙しく、それは彼自身の利益のためでもある。けだし、交易によつて、一國の自然的貯財は改善され、羊毛や亞麻は布に、皮革は革製品に製せられ、木材・鉛・鐵・錫は加工されて凡百の有用品となる。これら商品の中使用されない剩餘分は、商

人によつて輸送され、ブドー酒・油・香料・その他外國產の有用なすべてのものと交換される」⁷⁾と。

又、バアボンにあつては、戰爭用具に例をとり、一國に必要であつてしかも自國に存在しないものを獲得するという意味において、外國貿易が基礎づけられてもいる。⁸⁾

更に、以上のような外國貿易の必然性の基礎づけを内面的に支えているものとして、心理的要因を擧げることが出来る。先述せるように、バアボンは事物に有用性を與えるものとして、身體上の欲望と精神上の欲望とを區分した。この場合、精神上の欲望について次のように云つてゐる。

「精神上の欲望は無限である。人間は天性向上を望み、そして其の精神が高尙となるに従つて、彼れの感覺も一層洗煉されたものとなり、また一層喜悅の能力をもつやうになる。彼れの願望 *Desire* は擴大され、彼れの欲望は彼れの意欲 *Wishes* と共に増大する。意欲はすべて珍奇なものに對するものであつて、彼れの感覺を満足させ、彼れの身體を飾り、而して生活の安易、愉樂及び榮華を増進することが出来るのである」⁹⁾と。ところで、かかる無限という性格を付せられた精神上の欲望は、到底一國の生産物でもつて満足するものではなく、また、稀少であるという理由で外國品を求めるものもある。そこで、このように、すべての人々が外國製品を好むということが「外國貿易の主たる支柱」¹⁰⁾とされている。

更にもう一つ、外國貿易の必然性を論じている項目がある。¹¹⁾ 即ちそれは、彼の價值—價格論から來るものである。というのはバアボンは「使用され得る以上に存するところの國民の死せる貯財は搬出せられるであらう。そしてこのことが國內貯財の價格及び土地の地代を維持するであらう」¹²⁾と論じているからである。

この場合、特に附加しておきたいことは、バアボンが「外國の特產品は不確實な富である」¹³⁾として、いわゆる

仲繼貿易等を、高く評價していないことである。

以上のように、バアボンにあつては外國貿易の必然性が、とにかく一國の國民經濟の自律的觀點を中心として論じられていて、外國貿易を中心として、一國の國民經濟——富——が論じられているのではない。¹⁴⁾ところで、かく國內の交易論を中心として一國の富を論ずるという立場に移向する場合、それでは、トーマス・マン以來のバランス・オブ・トレード論に關して如何なる立場が執られているか。これを次に究明しなければならない。

バアボンは、このバランス・オブ・トレード論に鋭く對立する。¹⁵⁾バアボンによると、このバランス・オブ・トレード論は、商人が、人々が交易に關する正しい觀念をもつことを妨げるために工夫した議論であるとせられている。¹⁶⁾

バアボンは云う。通常バランス・オブ・トレードといわれている意味は、外國商品の輸入と國產品の輸出の均衡することである。そして、もし國產品の輸出が輸入される外國品よりも、より大なる價值を有するならば、その計算の差額は地金或は貨幣で決済されなければならず、そこで一國は、その計算の差額だけ富裕になるというのである。ところでこのバランス・オブ・トレード論は、「金銀が唯一の富であるという假設に基いてい¹⁷⁾る」しかも、この理論を強調する人々は、貿易國はこのバランスを有利にするように、法律によつて統制しないならば、破滅するであろうと主張するものである。

こうした考えに對して、バアボンは次のように反駁している。

先づ第一、外國商品の輸入と國產品の輸出とのバランスを發見することは、極めて困難であり、不可能ですらある。何故か。

(1) 一國が全體として貿易を行うのではなく、個々の商人が夫々の期間において貿易するのであるから、如何なる期間を基準としてバランスを計算するかという困難な問題が生ずる。

(2) そのため、このバランスを論ずる人々は通常數年間の貿易を考え、そしてその計算の基礎を税關の帳簿 *Custom House Book* に求めて、算定せんとするのであるが、これは不正確である。というのは、輸入される外國品は輸出される國內生産物よりも高率の關稅を支拂うからであり、また外國で國內生産物が如何なる價格で販賣されたかを知りことも出来ない。この後の點は重要である。「何故なら、バランス・オブ・トレードは輸出品の量からではなくて、販賣された財貨の價格から生じなければならないからである。」⁽¹⁸⁾

(3) この不正確を除去するため、外國爲替によるとの説もある。これは税關の帳簿からするよりは、バランスをより正確に推定する方法ではあるが、やはり全く不正確である。何故なら爲替相場は各週毎に騰落するものであるから。⁽¹⁹⁾

(4) バア・ボン²⁰は更に、たとえ、バランスが正確に把握され且つそれが順であると假定しても、地金で支拂われることを意味するものではなく、爲替手形 *Bill of Exchange* で支拂われると論ずるのである。

以上は、バランス・オブ・トレード論に對するバア・ボンの消極的な反對論にすぎない。彼はこの消極的反對論に加えて、積極的反對論を提供する。即ち、たとえ、このバランス・オブ・トレードが正しく把握せられたとしても、それによつて一國の損益のあるところを、そこに發見することは困難であると。何故なら、このバランスによつて一國に地金—貨幣がもたらされたとしても、金、銀も商品の一種にすぎない以上、どうしてそれが一國にとつて有利であろうか。百ポンドの銀は、百ポンドの銅と同じ價值である。その貿易によつて金、銀がもたら

されなくとも、それは金銀をもたらず貿易と同様に、商人にとつても、一國にとつても有利である。²¹⁾

否、彼にあつては、金、銀の流入よりも更に重要な關心事があつたのであつて、かくして彼は始めて、バランス・オブ・エンプロイメント Balance of Employment の思想を展開したのである。²²⁾

曰く「如何なる財貨及び如何なる貿易が、一國にとつて最も有利であるかを知る唯一の方法は、如何なる財貨が、その輸入と製造によつて、最も多くの人手を雇傭するかを検討することである。何故なら、勞働する人々はその時間に應じて支拂われる。一國において雇傭せられるものが多いほど、それだけその國は富裕になる。それ故に、亞麻・生糸・綿糸のような未完成の財貨や、ブドー酒・^{ビッチ}滌青・タール等のようなあらゆる種類の嵩高く且つ重い財貨の輸入は、絹・リンネル・キャラコのような完成財や、金、銀とかのその重量に比して嵩さの小さい財貨に比して、一國にとつてより有利である。何故なら一國は、生糸・亞麻・棉糸を、絹やリンネルや綿糸からつくられるすべてのものに、製造することによつて利益を得、且嵩高い財貨によつて、運賃により莫大な利益を獲得するからである」²³⁾と。かかる立場に立てば當然一國の富裕に關しても、次のように論ずることが可能なわけである。「そこで、國家をしてより富裕にし、或はより貧窮化せしめるものは、輸入財貨の價值から生ずるのでなくてはなくて、かかる財貨の性質の差から生ずるものである」²⁴⁾と。

- 1) Barbon, Trade, p. 9. 久保譯一二頁。
- 2) Barbon, Trade, p. 10. 久保譯一二頁。
- 3) Barbon, Trade, p. 11. 久保譯一三—一四頁。なお Barbon は Mun の説を完全な商人の養成規範としているが、これは Mun の誤解である。ibid., p. 6. 久保譯七頁參照。
- 4) Barbon, Trade, p. 11. 久保譯一四頁。

Barbon, Coining, p. 45.

5) Barbon, Trade, p. 21. 久保譯三三頁。

6) Barbon, Trade, p. 22. 久保譯三四頁。

7) Barbon, Trade, p. 5. 久保譯五頁。

8) Barbon, Trade, p. 14. 久保譯二〇頁。

9) Barbon, Coining, p. 44.

以上の人間の好奇心からする外國貿易の必然性に關し、Raffel は Barbon の外國貿易が主として奢侈品のそれであつたと云ふ指摘がある。Raffel, a.O.S. 39.

10) Barbon, Trade, p. 36. 久保譯六二頁。Coining, p. 49. 參照。

11) Barbon, Trade, p. 11. 久保譯一五頁。

この場合、重心がやがて國內經濟に中心を移したといつたのであつて、外國貿易が全く無視せられてゐるといふのではない。即ち Barbon は交易國民の貿易と住民の勤怠によつて富裕となるを論じてゐる。Barbon, Coining, p. 59. 更に見方によつては外國貿易を主として英國の富を論ずるかに思われる點もある。Barbon, Coining, p. 46. 參照。

12) Palgrave's Dictionary of Political Economy, "Barbon" の項參照。

13) Barbon, Coining, p. 52.

14) Barbon, Coining, pp. 35—36.

15) Barbon, Coining, p. 38.

16) Barbon, Coining, pp. 37—40. 參照。

17) Barbon, Coining, p. 53.

18) Barbon, Coining, p. 40.

19) Jacob Viner's English Theories of Foreign Trade before Adam Smith. (The Journal of Political Economy 1930, pp. 239—300) に於て Barbon は Balance of labor 或は balance of employment に最初に接近した人であると云つてゐる。

20) 21) 22)

ミロラス・スマサンの貿易論について

(4) 23) Barbon, Coining, p. 41.
Barbon, Coining, p. 51.

二、バアボンの貿易論—自由貿易論の性格

バアボンのようなバランス・オブ・エムプロイメントの立場に立つとすれば、それは他國との對立を豫想するものであり、必然的に保護主義的見地に立たざるを得ないであろう。ヤコブ・ヴィナアは云う。このバランス・オブ・エムプロイメント論は、すべての重商主義の理論の中で、それは最もよく批判に耐えて、保護主義の理論の重要な要素として、十九・二十世紀にまで存続していると¹⁾。事實バアボン自身もバランス・オブ・エムプロイメントがこの保護主義的方向に走る傾向にあることを指摘している。「あらゆる貿易國はこの法則を知悉しているが故に、そこで一切の完成製造品には高い關稅を、そして未完成品には低い關稅をかけるのである²⁾」と。

にも拘らず、彼はこの保護主義的立場を執らない。「こうした考えで、ある人々は、殆ど一切の製造品のみならず、他の多くの貨物を禁止せんとするものである。何故なら、彼等はいくつかの點において大きな誤りに陥入つてゐる³⁾」と論じている。とすればその間の事情は如何なるものであろうか。即ち彼の自由貿易論の性格を次ぎに検討する必要がある。先づ彼の自由貿易を主張する消極的論據—保護貿易反對論を聞こう。

バアボンは交易衰退の二大原因を多くの禁止と高い利子に歸せしめ、多くの禁止について次のように云つてゐる。「交易の禁止は其の衰退の原因である。けれど、外國商品なるものはすべて、國產品との交換によつてもた

らされるからである。だから或る外國品の輸入禁止は、そのために造られ且つそれと交換せられるために用いられるだけの國產品の製造及び輸出を妨げるものである。このような財を扱う工人と商人とは、彼等の職業を失う譯であり、そしてかかる職業によつて得られ、且つ他の交易者の間に擴散された利潤が失われる譯である。

このような輸出のないために、國內貯財は價值において下落し、土地の地代は貯財の價值と共に下落せざるを得ない」と。また別の個所で「貨物の輸入を禁じたり、或は禁止と同じ位の高關稅を課する多くの法律程、英國の交易にとつて危険なものはない」とし、かかる禁止から生ずる損失を擧げている。即ち、(1)禁止國に對する貿易が止み、それによつてその外國品の販賣によつて英國商人の得た利潤が失われる。(2)船舶の所有者は運賃を失う。(3)外國品と交換される國產品より生ずる利潤が失われる。(4)政府に對する關稅の利益が失われる。

かかる貿易禁止から生ずる弊害を論じつつ、バアボンは自由貿易論を展開する。この場合、彼をして自由貿易論を執らしめた支柱は既に論じたとように、外國貿易の必然性を論ずるその論據のなかに準備されていた。即ちその第一は、人間の心理的論據から自由な貿易を主張しているのである。⁶⁾

(1)外國貨物を輸入し消費しても、外國貨物の輸入を禁ずる人々の心配するように、自國で產出せられる同種財の製造及び消費を妨げるものではない。「人性は僅少のもので満足させられるものであるから、消費を喚起するのは必要ではなくて、交易を喚起するものは、精神の欲望、即ち流行であり、また新しいもの、珍らしいものに對する欲望である。英國製のレイス・手袋・絹を、その欲するだけでもついで、それ以上かかるものを買おうとしない人も、ヴェニス⁵⁾の針編レイス・デュシイミンの手袋・フランスの絹物には、彼れの貨幣を支出しようとし、英國製ベイコンを食おうとしない人でも、ウェストフアリアのベイコンならこれを食べようと欲する人がいるであ

ろう。だから外國品の禁止は必ずしも同種の英國品の消費の増大を惹き起すとは限らないのである。」

(2) 外國人も英國人と同じように、新奇なものを欲するのであるから、たとえ、外國品の使用又は消費は、英國における同種商品の消費を減じたとしても、製造される量を減ずるものではない。更に、「若しも同量がつくれるならば、それらが外國において消費される方が、國內で消費されるよりも、一國にとつては遙かに有利であるだろう。何故ならば、これによつて諸掛り及び運送費が儲けとなり、それが嵩の高い財であれば、全價値の四分の一にも達するからである。」

更に、かかる心理的論據における自由な外國貿易論を主張せしめる物的な支柱は、特產品の無限という論據である。即ち、特產品は永久的であつて、決して消盡されることのないものであつた。「地の獸畜、空の鳥禽、海の魚介は自然に増加するものである。年々新しく春秋が巡つて來て、植物と果實の新しい貯財を生ずる。そして土地の礦物は無盡藏である。だから若しも自然的貯財が無限であるとすれば、これから製造される人工的貯財、例えば、亞麻・羊毛・木綿・生糸から造られる毛織物・亞麻布・キャリコ・絹織物等の如きは無限であるに違いない。」とすれば、この無限なる自國の生産物をもつて、相互扶助的に、自由な外國貿易を營むことは、決して怖れるにあたらずなつてくる。

これに加えて、貿易を禁止することは、他國の報復を生ぜしめる。「しかしすべての交易國は交易の有利なことを研究し、加工品を未加工品と交換することによつて利潤に差が生ずることを知つてゐる。それ故に、如何なる國民にとつても、最も有利なものだけを除き、それ以外の外國財を禁止する法律を制定することは、他の國民にも同じような法律を制定するよう促すことになり、その結果はすべての外國貿易を破壊するに至るであらう。

けだし、すべての外國貿易の基礎は、各國の國產貨物を相互に交換することに基づくからである。¹⁰⁾

更に、バアボンの自由貿易論において注目すべきは、彼の交易論が流通と生産とを含めたものであつたように、この自由が國內、國外を問はず、あらゆる方面にわたつての自由を強調している點である。曰く「トルコ商人は東印度會社を論難し、羅紗商は絹物商を攻撃し、室内裝飾師は籐椅子製造者に反對する。或る者は交易業者が多過ぎると觀、また建築家の多數を歎じ、他の者は居酒屋の數が多きに失すると云う。また或る者は特定貨物の獨占的生產に贊意を表し、他の者は特定の國々との獨占的交易を辯議する。かくて、若しもこれらの論者の主張が勢力を得て、彼等がそれほどまでに懇請するところの法律（彼等はすべてこのような法律は交易の發展及び國民の公益に資するものだと言張する）を獲得することに成功するやうなことにでもなれば、次の世代の人々を從事せしめるために、ほんのわづかの交易しか殘されないのである。従つて、これらの新進者が彼等から特權を購いでもない限り、造るべき財の種類も遙かに少くなり、そのこと交易すべき一隅もなくなるであろう。

だから交易の擴大及び發展のためにする彼等の口實が如何ほど公正で且つ信頼するに足るやうにみえても、交易の數・人・場所を局限しようとの彼等の論議の結論は、まさに、交易の擴大とは相容れないのである¹¹⁾。かくして、「あらゆる種類の財貨が全く禁止せらるべきではない。交易が自由になればなるほど、一國はますます繁榮する¹²⁾」と論じえたのであらう。

然し、以上のようなバアボンの自由貿易論には大きな制限があつた。元來、完全な自由貿易論はその物的基底として、自立した産業資本の生長を要求する。バアボンにあつては、交易が生産と流通とを含めたものであるとしても、完全に自立せる産業資本の分析に向つてゐるものではなかつた。この完全な産業資本は、その理論的表

現として、經濟の自律的機構 *Self-regulating mechanism* を表明するものである。だから、バアボンにあつては、この經濟の自律的機構——それより生ずる完全な意味の自由貿易論が主張されえないことになる。經濟の自律的機構の排除を表明するバアボンの立場は、ノオスと對照せしめられるその利子引下論において見られる。バアボンは交易の衰退の原因として利子の高いことに言及し、オランダと比較しつつ、高利はイギリス商人の外國商人に對する競争力を弱め、地代を低落せしめると主張し、利子の人爲的引下げを提唱しているのである。¹³⁾

バアボンをしてその理論上、完全な意味の自由貿易論者と稱することを出来なくさせている他の點は、彼が、禁止に代えるに關稅政策をすすめていることである。「要するに、外國財の輸入が國產財の製造及び消費を妨げるとしても、——かかることは極めて稀有のことに屬するであらう——この不利益は、これを救済するには、決してこれらの財の輸入禁止によるべきではなくて、これらに非常に高率の關稅を賦課し、これによつて我國の製品よりもそれらが常により高價となるようにすることによるべきである。」¹⁴⁾ また「外國商品に課せられた、よく統制された比例的な關稅は、貿易國にとつてきわめて有益であらう。しかし、その場合、それは、外國貨物の輸入を妨げたり、同じ目的に使用される國產品の製造や消費を減少せしめないように比例しなければならぬ。」¹⁵⁾ 何故なら「高價ならば、これらのものの一般的消費は妨げられ、高價なるが故にこれらを尊重し、また若しも外國製が輸入されなければ、おそらく、もはや英國製をこれ以上消費しないであらうところの、紳士の使用のためにのみ、それらが保留されるからである。かくの如き關稅によつて王の收入は増大されるであらう。」¹⁶⁾ しかもバアボンにあつては、こうした制限を自由と呼ぶことを妨げなかつたのである。「而して彼等の好む如何なる關稅乃至負擔を課そうと、それは各國の自由であるから、何れの外國君主又は政府といえどもこれに異議を唱えることは出来な

い譯である。交易は依然として開放され且つ自由たるべく、交易者は、交易の利益を享受するであろう」と。¹⁶⁾

こうした保護主義的色彩の中に、われわれはバアボンが國內産業の發展を考慮し、その限りに於いて、無制限な自由貿易を主張したものでないことを知るのである。

ところで他ならぬこの點、即ち、國內産業の立場に立ち保護主義的色彩をとるけれども、しかも、自由な貿易を主張したというところに、われわれは、英國初期資本主義における自由貿易論のなかで、バアボンの特殊の地位を見出しえないであらうか。この點を次に究明しよう。

- 1) Jacob Viner, *ibid.*, pp. 298—299. 參照。
- 2) Barbon, *Coining*, pp. 41—42.
- 3) Barlow, *Coining*, p. 42.
- 4) Barbon, *Trade*, p. 35. 久保譯五七頁。
- 5) Barbon, *Coining*, p. 42.
- 6) この點について Raffel は Barbon は自由貿易論に對して、心理的基礎づけをあたえた最初の人である。彼は人間の性質から自由な通商の必然性を宣明したと云つてゐる。Raffel, *aa.O.S.* 38. 參照。
- 7) Barbon, *Trade*, p. 35. 久保譯五七—五八頁。
- 8) Barbon, *Trade*, pp. 35—36 久保譯五八—五九頁。
- 9) Barbon, *Trade*, pp. 10—11. 久保譯一三頁。
- 10) Barbon, *Trade*, p. 37. 久保譯六一頁。
- 11) Barbon, *Trade*, pp. 6—7. 久保譯七一八頁。
- 12) Barbon, *Coining*, p. 59.
- 13) Barbon, *Trade*, pp. 38—43. 久保譯六二—七一頁參照。
- 14) Barbon, *Trade*, p. 37. 久保譯六一—六二頁。

Barbon, Coining, pp. 42—43.
16) 15) Barbon, Trade, pp. 37—38, 久保譯六二頁。

三、アダム・スミス以前の自由貿易論におけるバアボンの位置

一、周知のように、アダム・スミスはその國富論第四編第三章第二節において次のように云つてゐる。「世には、貿易上の收支の均衡とは別個の均衡があり、その均衡が有利となり不利となるに従つて一國民の榮枯盛衰が必然に分れる。年々の生産と消費の均衡 the balance of the annual produce and consumption は則ちそれである。

……年々の生産物の交換價值が年々の消費のそれを超過するならば、この超過の度に應じて、その社會の資本は、年々に増加するに相違ない。……これに反して、年々の生産物の交換價值が、もし年々の消費に足りないならば、この不足の度に應じて、その社會の資本は年々に減少するに相違ない。……この生産と消費との均衡は、所謂貿易上の收支の均衡とは全く異なるものである。外國貿易を全くもたずして、すべての世界から全く隔離されてゐる國においても、これは起り得るのである。これは、地球全體についてもいわれることであつて、その富と人口とが除々に増加していることもあり、また徐々に減退していることもある¹⁾と。

ここで、アダム・スミスの生産と消費の均衡に對比せしめられてゐるのは、云うまでもなくトーマス・マンの「外國貿易によるイギリスの財寶」に定式化された、バランス・オブ・トレード論である。「王國は他國民からの贈物とが掠奪品によつても富裕となることが出来るけれども、これらは不確實なものであり、又あつたとしてもこれらは殆ど考慮に値しない。わが國の富とか財寶を増大せしめるための通常の方法は従つて外國貿易である。

外國貿易においてはわれわれは自ら消費する外國商品の價值以上を年々外國人に賣るといふ原則に違わねばなら
ない。」

以上マンとスミスのバランスの性格を見ると、スミスが生産面—産業資本の立場に立つて、一國の經濟的バランスを内部的に論じているのに對して、マンは流通面—商業資本の立場に立つて一國の經濟的バランスを對外的に論じていることが知られる。勿論マンの場合においても、それが生産に全く基礎をおいていないと云うのではない。只そこに支配的な面が流通に現れているというのである。

ところで流通面—商業資本の立場は、それ自體完結した立場を表示するものではない、というのは、流通は生産なくして存立し得ないからである。これに反して、生産の立場はそれ自體存立しうるといふ、論理的構造においては自立的立場を有するものである。このことは、流通面—商業資本の立場は、言葉のすぐれた意味において、過渡的な性格を有するということを意味する。即ちそれは自己矛盾的存在であるということである。そこで、かかる流通面—商業資本の立場に足を踏まえたバランス・オブ・トレード論は、それ自體として一つの再生産的立場—自律的機構を現わしているのではあるが、それは流通面を中心とし、自立した存在ではないという意味において、不完全な、謂わば過渡的な再生産の立場を表示するものである。だから、それは當然、流通は生産に依存せざるを得ない、という論理構造において、それ自體、自立的概念たる、生産面—産業資本を立場とする再生産構造に移向せざるを得ない。即ち、マンのバランス・オブ・トレードは、その論理的必然性において、スミスの生産と消費のバランスにまで展開せざるを得ないことを示すものである。

こうした推移過程を別の方向から考察することが出来る。それは初期のプリオリズム、及びバランス・オブ・

トレードの外國貿易政策が、バランスを有利にするという意味において、極めて國家干渉的——獨占的傾向が強いのに反して、アダム・スミスの貿易論がいわゆる自由貿易という姿を執っている點に關係しているものである。この點に焦點を合せると、先のバランス・オブ・トレードから生産と消費のバランスへの推移過程は、獨占的貿易論から自由貿易論へと云う形において把握され得るものであろう。

しかも以上の二つの推移過程は、これを統合して、商業資本の制覇から産業資本の自立化に到る物的過程の推移の表現として把握出来るものである。即ち商業資本の制覇する場合においては、バランス・オブ・トレード論が執られ、しかもそれは獨占的、干渉的な外國貿易論となるに反して、産業資本の一應の自立的立場に立つと、それは生産と消費のバランス論となり、さらにそれは、國內一般を中心とし、國內の生産活動の自由の系として、外國貿易の分野においても、自由貿易論が執られるに至ると考えられる。

問題は、そこで、こうした重商主義的貿易論からスミスの自由貿易論への推移が、如何なる形において現われているかを究明することではなければならない。こうした轉換は坦々たるものであつたであろうか。この問題を解く鍵として、我々は、そこに、二つの貿易論の間の中間の環たる性質をもつ、スミス以前の自由貿易論——今の場合はバアボンのそれ——を取上げなければならないと考えるのである。

二、ところで、こうした意味において、重商主義的な、獨占的、干渉的貿易論から、スミスの自由貿易論に至る中間の環としての存在をもつ、スミス以前の自由貿易論——バアボンの自由貿易論の意義を明らかにするためには、自由貿易なる言葉の意味が歴史的に變化していることに着目し、その特色を明確にしなければならない。

自由と云う言葉は、拘束からの自由を意味するものであるから、拘束の性質によつて、その自由の性格も異つ

て來るものである。事實、自由貿易 Free Trade なる言葉も、時代的に、種々の意味に用いられて來ている。⁴⁾ 先づ獨占的、干涉的貿易論とした重商主義の代表者トーマス・マンも、彼が貨幣輸出の自由を説く點において、自由貿易論者と稱し得られるものであつた。⁵⁾ 更に、對東印度貿易、對佛貿易を中心として論争を續けて來た、いわゆる自由貿易論對保護貿易論において、商業資本の立場を代表する東印度會社の代辯者達が、商品の自由な流通を主張する意味において、自由貿易論者といわれている。⁶⁾

然しながら、ここで注目したいのは、同じく英國における自由貿易論の展開を論述した二人の著者、ラッヘルとベツカア⁷⁾が、その自由貿易論者の中からこれらの商業資本の立場にたつ人々を除外して、等しくベティから筆を起している點である。このことは極めて示唆的である。何故なら、それは、マンやチャイルドやダベナントの自由貿易論が、そのままの連續的な發展として、アダム・スミスの自由貿易論に展開するのではなくて、そこに大きな交替、一つのインフレックス・ポイントの存在を暗示していることを考えしめるからである。そして、アダム・スミスへの連續としての、マンやチャイルドとは系譜を異にした自由貿易論の存在を示しているからである。事實、張漢裕氏も、マンは自由貿易論者であると論じたその後で、次のように云う。「しかし、マンの『自由』は商業資本の自由である。だからそれは商業資本の獨占と共棲しているのである。即ち、マンは熟練の名において獨占を辯護している。商業資本の自由はかくて獨占することの自由であり、或いは自由の獨占である」と。これに反して、スミスの自由貿易論は如何なる構造を有していたか。それは國內市場一般の立場に立ち、國內商業の優位の主張の下に外國貿易が論じられ、しかも産業資本の確立せられた中心體から外國貿易の分野にその考えが流露せしめられている。國內産業の自由↓外國貿易の自由、なる姿を執るものである。

それ故に張漢裕氏も前の言葉に續けて、「かような商業資本の『自由貿易』及びその先蹤は、これとは反對に獨占の容赦なき排撃を含むアダム・スミスの自由放任（リッセ・フレル）と甚しく性質を異にしなければならない筈である」として、マンの自由貿易論のスミスへの連續的な系譜を否定する。並に、「他方において、『自由貿易』の對立物たるマニファクチャ産業資本の保護主義と、同じマニファクチャのために機械制大工場への推轉、即ち産業革命への道を拓くスミスの自由放任（リッセ・フレル）との間には、系譜上の密なる親近性を感じざるをえないのである」としている點からも、ここに一つの變曲點の存在することが知られる。何故なら、アダム・スミスにまで連る自由貿易論——産業資本の發展に關連せる自由貿易論がその間に形成されていなければならないからである。外國貿易の分野においても、スミスが一舉にあの思想を展開したとは考えられないからである。

そして、もし以上のように考えることが許されるところならば、商業資本の主張する自由貿易論とは異つて、實に、アダム・スミスの自由貿易論にまで連續的に展開しうる自由貿易論の萌芽が、マニファクチュア産業資本の發展と關聯しつつ、或はかかる段階の産業資本生長のための保護主義と關聯しつつも自由貿易論として存在することが、この變曲點において把握されなければならない筈である。

では、この變曲點を何處に求めたらよいか。張漢裕氏は、十八世紀初頭のブリイティッシュ・マアチャント British Merchant に、これを求めているけれども、私は先に論述したところから、逆に、トリーリ11的自由貿易論の起源として、その中の一人に指摘されている、このバアボンあたりに見出されはしないかと思ふのである。

三、先に論じたように、バランス・オブ・トレードはスミスの生産と消費のバランスに轉化しなければならないものであつた。それは商業資本中心から産業資本中心に理論の場が移行することを示している。しかも、この移

行する變曲點に出現するバランスこそ、實に、バランス・オブ・レイバ balance of labour 或は、バランス・オブ・エンプロイメント balance of Employment ではなからうか。この思想はバランスを對外的に求めることにおいて、バランス・オブ・トレードの殘滓を止め、エンプロイメントを主張することにおいて、産業資本の發展に連なるものである。この意味において、まさに、そうした變轉の相を自己の中に如實に表現しているものはなからうか。しかもこのバランス・オブ・エンプロイメントは明らかに保護主義的色彩を有するものである。そこで、かかる保護主義的性格を有するバランス・オブ・エンプロイメントを主張し、しかもそこに自由貿易論性主張するその性格の複雑性こそ、正にスミスに先立ち、しかもスミスに連なる自由貿易論のたねばならないを格ではなからうか。

ところで、バアボンは、既述のように、始めてこのバランス・オブ・エンプロイメントの思想に接近した人であり、しかもその貿易論の基調において自由貿易論を主張している。とすれば、彼において、スミスに連る道が準備されていたと云われなければならない。またそのことは、現實において、彼が商業資本と産業資本の覇權の交替の交點に立つていたことをうかがわしめるものである。そうした點よりすれば、先にあげたバアボンの自由貿易論のためらいが、以上の現實の地盤を反映したものに他ならなかつたことが理解せられるであろう。

だから、バアボンに續く、こうした地盤に立つて、自由貿易論を論述したと云われる人々、即ち、ラッヘルに従うと、North, Consideration on the East India Trade の著者 Vanderlint, Decker, Humé, Tucker 等の人々は、彼等が自由貿易を主張する限りにおいて、産業資本の確立過程における自由貿易論を、スミスへの連續において論述している。逆に云えば、彼等は自由貿易論を主張することにおいて、産業資本の生長を物語つてゐると

云えないであらうか。¹²⁾私は、そうした點に、アダム・スミス以前の自由貿易論の特質を把握したいと考えるものである。最後に今一度繰返すと、これに反して、スミスにおける自由貿易論は、既に確立せられた産業資本の立場—經濟の自律的機構を中心とし、そこから流出的に外國貿易の自由に及んでいるものである。

更に、以上の點において、産業資本の立場に立つ人は、獨占的意味での自由貿易論を、マニユファクチュアの立場に立つ人は保護主義的貿易論を主張すると、鋭く對立的に論ずることは出来ないであらう。何故なら、何れも、英國に基盤をおいているからである。當時、英國においては、商業資本は古典的姿において、産業資本にその席をゆすつたものとすれば、こうした推移が、その複雑な相において、經濟思想に表現せられる場合、商業資本も産業資本も産業資本の利益を無視することが出来ず、産業資本も商業資本の庇護の下にあり、兩者相争うけれども、相違なく英國の先進資本主義國としての地位を築きつつあつたものである以上、商業資本と産業資本とを一國の全體性において把握することも可能なわけである。

- 1) Adam Smith, *Wealth of Nations*, (Modern Library) p. 464. 大内譯、第三分冊、一二五—一二六頁。
- 2) Thomas Mun, *England's Treasure by Foreign Trade*, 1664. 堀江譯、一九頁。
- 3) マルタス資本論、第三卷、第二〇章參照。
- 4) この點に關しては、Palgrave's Dictionary of Political Economy, "Free Trade" の項參照。
- 5) この點につき、張漢裕氏は「その「トーマス・マンの貿易差額論とプリオニズム」において、「私は敢えて呼ぶ、マンは『自由貿易』論者である」と云つてゐる。經濟學論集、一〇卷七號、一〇七頁。
- 6) この點につき、張漢裕「名譽革命前後(一六七〇—一七二〇)におけるイギリス重商主義の本質」經濟學論集、一卷三號、及び P. J. Thomas, *Mercantilism and the East India Trade*, 1926. 參照。
- 7) Friedrich Kaffel, *Englische Freihändler vor Adam Smith*.
- 8) Hermann Becker, *Zur Entwicklung der englischen Freihandelslehre*, 1922.
- 9) 張漢裕「トーマス・マンの貿易差額論とプリオニズム」一〇九頁。
- 10) 張漢裕「名譽革命前後(一六七〇—一七二〇)におけるイギリス重商主義の本質」
- 11) Ashley, *The Tory Origin of Free Trade Policy*.

12)

勿論この場合ラッヘル指摘している人々が、すべて産業資本の立場に立つて自由貿易論を主張しているか否かは、検討を要する重要な点である。

附記 本稿は昭和二十五年十二月九日開催された經濟學史學會第二回大會で報告したものである。その際、極めて有益な諸注意を受け、多くの點で更に考えなおさなければならぬものであるが、そのことは將來に期することとし、ここでは一應そのままの形で發表することをお許し頂きたい。